はじめに

・入試で出題される古文は、様々なジャンル・作品があるが、その中である特定のものは何度も繰り返し出題されている。いわゆる頻出出典・頻出箇所と言われるものである。

・ところが、こうした頻出出典や頻出箇所について、多くの受験生は、いずれか一つの入試問題を解いて、それで完結していることが普通である。

・実際に一度解いたことのあるものが、別の入試で出題されると、あらすじは知っているので、読解に困ることはないはずなのに、設問になかなかうまく答えられないということがある。

・その原因はいくつか考えられるが、大きなものとしては次のような原因が考えられる。

(1) 古典作品は、書写によって継承されてきたものである。その過程において、文章に異同が生じることがあり、時にはその異同によって話の展開や内容に微妙な違いが生じたりすることがある。また、句読点のつけ方によっても文脈の係り受けが異なって、内容に微妙な違いが生じることもある。だから、使われる文章によって、一度解いたことのあるものとは異なっていたりして、設問によってはその解答の方向性が異なったりすることがある。

(2) 同じ文章で同じ傍線部であっても、出題者の意図によっては、別の解答となることがある。特に客観型の場合はそういうことが多く見られる。

・こうしたことから、一度解いたことがあるのに、あらすじがわかっているのに、設問にうまく答えられないということが生じると思われる。

・こうしたことへの有効な対処方法は、**同じ文章で他大学で出題されている問題をいくつか解いてみること**である。時にそれは私大型であったり、国公立大の二次型であったりする。そして、**その文章や違う設問も含めて、しっかりとその**

文章の内容を理解することである。

・ところが、既存の市販されている多くの問題集は、こうした観点で編集されているものはほとんどない。

・本問題集は、今まで見逃されてきたこうした観点に立った問題集である。

・**頻出出典・頻出箇所の文章をジャンル別に厳選。**

・**演習問題として一つの入試問題を選び、解説の中で、その設問に関する他の出題歴のある設問も紹介。**

・**実力アップ問題として他大学の問題を掲載。**

・このように、一つの文章・作品を多角的に学ぶことで、その出題された文章をしっかりと理解して、今後入試で出会ったときに、迷うことなく解答できるようにと配慮した。

・来たる入試本番でこれらの文章に出会った際に、この問題集をしっかりとこなした諸君が安定して高得点を獲ることができ、そして、ここで得た実力は、初見の入試問題にも着実に対応できる力になっていることと切に願うものである。

目次

第一章 説話

1 十訓抄 …… 8 ◀頁 実力アップ① 15 ◀頁
2 発心集 …… 19 実力アップ② 25

第二章 歌物語

3 伊勢物語 …… 29 実力アップ③ 38
4 大和物語 …… 43 実力アップ④ 50
5 平中物語 …… 55 実力アップ⑤ 64

第三章 作り物語

6 落窪物語 …… 70 実力アップ⑥ 77
7 源氏物語 …… 82 実力アップ⑦ 90
8 堤中納言物語 …… 96 実力アップ⑧ 105

第四章 歴史物語

9 大鏡 …… 110 実力アップ⑨ 118
10 今鏡 …… 122 実力アップ⑩ 132
11 増鏡 …… 139 実力アップ⑪ 145

第五章 軍記物語

第六章 日記

12 平家物語（一） …… 151 実力アップ⑫ 160
13 平家物語（二） …… 165 実力アップ⑬ 177
14 平家物語（三） …… 182 実力アップ⑭ 192
15 土佐日記 …… 198 実力アップ⑮ 204
16 更級日記 …… 209 実力アップ⑯ 218
17 讃岐典侍日記 …… 223 実力アップ⑰ 233

第七章 随筆

18 枕草子 …… 240 実力アップ⑱ 249
19 徒然草 …… 253 実力アップ⑲ 259
20 玉勝間 …… 262 実力アップ⑳ 268

第八章 評論

21 俊頼髄脳 …… 271 実力アップ㉑ 281
22 無名抄 …… 285 実力アップ㉒ 291
23 無名草子 …… 296 実力アップ㉓ 305

付録

主な敬語動詞一覧 …… 308
古文読解へのアプローチ …… 310

構成と利用法

〔演習問題編〕

第一章から第八章となっている。

それぞれ入試に頻出するジャンルを配置してある。

それぞれの章は、各2～3題の演習問題からなっている。

そのジャンルの中でも頻出する作品・箇所を選んである。

採り上げた入試問題は、国公立大学の二次型問題・私大型の問題である。

〔解説編〕

解説編は、解答・出典と本文解説・全文解釈・注意すべき古語・設問解説と実力アップ問題からなっている。

■解答■

演習問題の解答をまとめて掲載してある。記述式の解答はあくまでも解答例である。設問解説をよく読んで、自分の解答の不備などを確認してほしい。

■出典と本文解説

出典は、必要な情報を簡潔に示しておいた。本文解説も、解釈例があるので、要点を簡潔に示しておいた。

■全文解釈

解釈を示す前に本文を再録して、本文の切りのよいところで番号を付しておいた。それに合わせて解釈例にも番号を付してある。解釈例は、逐語訳を心がけた。（　）を付した所は、主体などの補いである。

【注意すべき古語】

本文を読むあるいは解釈する際に、気をつけたい古語を取り上げてその意味を記した。ただし、敬語動詞については、あえて取り上げなかった。それはいうまでもなくその敬語動詞のすべてが重要古語であり、いちいち取り上げるまでもないからである。巻末に敬語動詞の一覧があるので、つねにそこを見て確認してほしい。

■設問解説

各設問の解答の導き方・ポイントを、なるべく煩雑にならないように気をつけて説明してある。記述式設問では、書き込むポイントも説明して、自己添削もできるように配慮した。

実力アップ問題

演習問題で採り上げた本文と同じものを扱っている他大学の入試問題を採り上げてある。本文の長さが演習問題より短いものが中心だが、中には演習問題より長い場合もある。本文の表記も演習問題とは異なることが多いので、十分に注意して読んで解答してほしい。演習問題であらすじを知っているからということで、本文を読まずに解くことは決してしないで、かならず本文を読んで解いてほしい。

後ろに**解答とコメント**として、簡単に設問解説を示しておいた。また、配点と採点基準も示して、テスト感覚と復習感覚で解いた後、自分の理解度などを確認できるようにした。

1　十訓抄

解答

問一　a　ひさし　b　B　c　宿直
問二　X　D　Y　C
問三　1　どうして逃がしましょうか、いえ、逃がしません。
　　2　笑うことができない。
問四　D
問五　C
問六　武者
問七　C
問八　うちなんどして（7字）

出典と本文解説

「十訓抄」は鎌倉時代中期成立。世俗説話集の代表的作品である。編者は六波羅二臈左衛門と言われるが、その人物像は明らかではない。題名どおり、十条の徳目（教訓）を挙げ、それにふさわしい説話を収めている。約二八〇話の故事逸話からなる。

本文は、滑稽談の典型である。主人の命令を文字通り受け取ったために、主人の思惑と侍の行動に齟齬が生じた話である。

〔出題〕明治大学

全文解釈

本文

1 七条の南、室町の東一町は、祭主三位輔親が家なり。2 丹後の天の橋立をまねびて、池の中嶋をはるかにさし出だして、小松をながく植ゑなどしたりけり。3 寝殿の南の廂をば、月の光入れむとて、ささぎりけり。

訳

1 七条の南、室町の東一町（の区画）は、祭主三位輔親の邸である。2 丹後（の国）の（名勝である）天の橋立をまねて、池の中嶋をずっと長く突き出して、小松を何本も植えたりなどしていた。3 寝殿の南の廂を、月の光を取り入れようとして、（格子を）閉ささなかった。

本文

4 春のはじめ、軒近き梅が枝に、鶯のさだまりて、巳の時ばかり来て鳴きけるを、ありがたく思ひて、それを愛するほかのことなかりけり。5 時の歌よみどもに、「かかること

【注意すべき古語】
○まねぶ［動四］①まねる。②そのまま伝える。
○廂［名］①寝殿造りで、母屋の外、簀子の縁の内側にある細長い部屋。

【注意すべき古語】
○おほかた 副 ①だいたい。②ぜんぜん～打消。
○あさまし 形 ①驚きあきれるほどだ。②情けない。嘆かわしい。③見苦しい。
○心憂し 形 ①つらい。②情けない。
○をかし 形 ①興趣深い。②美しい。かわいい。③滑稽だ。おもしろい。
○え 副 ①（打消表現と呼応して）～できない。
○おろかなり 形動 ①いいかげんだ。②並々だ。③愚かだ。
↓こともおろかなり 慣用 ①言うまでもない。表現不足だ。

設問解説

問一　漢字の読み・書き

a　「廂」は、「ひさし」と読み、「庇」とも表記される。主に、寝殿造りの母屋の外、簀子の縁の内側にある細長い部屋のことをいう。この「廂」に女房などの局（＝部屋）が設けられたりすることがある。

b　漢字になおす問題。ここは「月の光を入れ」ようとして「廂」を「ささ」なかったというのである。「廂」には「格子」があることを思い浮かべたい。「月の光」を「入れ」るために、その「格子」を「ささ」ないというのだから、「閉ざさ」なかったということになる。正解はB。

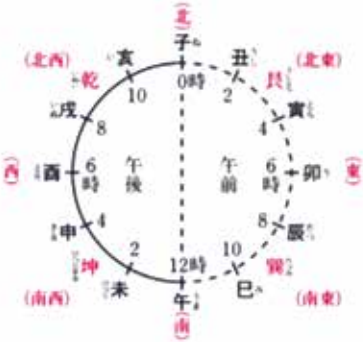
c　漢字になおす問題。「とのゐ」は「宿直」と表記する。「宿直」は、宮中などに宿泊して、事務や警備に当たることである。

Check!
他大学でも知識問題として、ここと同じく「廂（庇）」「宿直」の読みがよく問われる。
また、「丹後」の現在の都道府県を問うこともある。細かい知識かもしれないが、主立った旧国名と現在の都道府県とを知っておくとよい。
（正解：京都府）

問二　空欄補充

ここは、選択肢を見てもわかるように、十二支と時刻を考えて答える。選択肢の十二支と時刻の関係は次のとおりである。

A　子＝午前0時前後
B　寅＝午前4時前後
C　辰＝午前8時前後
D　巳＝午前10時前後
E　申＝午後4時前後
F　酉＝午後6時前後
G　亥＝午後10時前後



毎日Xの時ぐらいに驚がやって来て鳴くので、次の日のYの時ぐらいに来て聞いてくださいと触れ回ったとある（**B**）。こ